平成16年12月27日
気　　象　　庁

三宅島の火山活動に関する火山噴火予知連絡会拡大幹事会見解

三宅島では、小規模な噴火が時々発生していますが、火山活動は、全体として大きな変化はありません。今後も小規模な噴火の可能性はありますが、現段階で大規模な噴火につながる兆候は認められません。火山ガスの放出量に若干の低下傾向がみられるものの、火山ガスの放出は当分継続すると考えられます。引き続き火山活動の推移を注意深く見守る必要があります。

三宅島では、2004（平成16）年11月30日から12月9日にかけて4回の小規模な噴火があり、山麓で少量の降灰がありました。この頃から山頂直下で発生する低周波地震がやや多くなっています。

二酸化硫黄の放出量は、2002（平成14）年秋以降、横ばい傾向が続き、1日あたり3千～1万トン程度でしたが、最近3ヶ月程度の間、1日あたり2千～5千トン程度とやや少なくなっています。放熱率は2002（平成14）年夏以降、ほとんど変化はありません。

これまで火山ガスの組成比には顕著な変化は認められていませんが、今回の小規模な噴火によって噴出した火山灰の分析によっても、火山ガスの組成を示す水溶性付着成分には2001（平成13）年以降の結果と変化は認められません。

火口内の表面温度には、最近2年以上大きな変化はありません。全磁力観測からは、2002（平成14）年以降山頂火口直下の温度の長期的な低下傾向が続いていると推定されます。

山頂火口直下浅部の地震活動は続いています。小規模噴火が観測されるようになった12月に入ってから、小さな空振を伴う低周波地震がやや多くなっています。なお、この低周波地震や空振は、火山ガスの間欠的噴出に関連していると考えられます。

三宅島の収縮を示す地殻変動は2002（平成14）年以降は徐々に小さくなり、最近も大きな変化は見られません。

今回観測されたような小規模な噴火や低周波地震の増加は2001（平成13）年から2002（平成14）年にかけてもみられました。今後も同様の小規模な噴火を繰り返す可能性があります。

三宅島では、約2500年前に現在と同様のカルデラが形成され、その後1400年程度かけてカルデラを埋積するような活動がありました。中長期的にはカルデラを徐々に埋積するような活動の可能性はありますが、現段階で大規模な噴火につながる兆候は認められません。

以上のように、小規模な噴火が時々発生していますが、三宅島の火山活動には、全体として大きな変化はありません。火山ガスの放出量に若干の低下傾向がみられるものの、火山ガスの放出は当分継続すると考えられます。

三宅島では、今後も局所的に高い二酸化硫黄濃度が観測されることもありますので、風下に当たる地区では引き続き火山ガスに対する警戒が必要です。また、雨による泥流にも引き続き注意が必要です。